

中学校国語科の教科指導・授業改善の支援

東部教育事務所 指導主事 濱田美貴

1 はじめに（大学院での研究の内容と成果）

大学院での研究の主たる内容と成果は、次の3点である。

①旧学習指導要領と現行学習指導要領の「指導事項」「言語活動例」の比較・分析による考察

→「言語活動の充実」のねらいや、その指導に関する理解が深まった。また、各領域で付ける力が段階的・螺旋的に系統化されている具体の確認ができた。

②言語活動の充実における小学校国語科教育の研究（「小学校国語教科書における「言語活動力」カリキュラムの検討—光村図書・6年（平成23年度版）『創造』の場合—」と第5学年の授業実践）

→言語活動を通して指導事項を身に付けるには、言語活動を実践できる力の育成が必要であるという課題意識をもった。そして、言語活動を支えている力を分節・措定し、それぞれの力を意図的に育てる指導・支援の在り方について考えることができた。

③中学校国語科における「批評」カリキュラムの研究

→「批評」に必要な要素を「分析の観点をもつこと」「分析すること」「自分の考え（判断・評価）をもつこと」と措定し、教科書カリキュラムを編成して分析・考察を行った結果、それぞれの力が、段階的・螺旋的に系統化して習得されていることを明らかに示すことや、各学年での「批評」の到達段階を捉えることができた。

2 研究の成果をふまえた平成26年度の実践内容

本年度、指導主事として東部教育事務所に配属され、国語科の教科指導や授業改善の支援にあたることとなった。大学院での研究と関連のある実践内容を2例挙げる。

(1) 学力調査問題結果の分析会における指導・支援

校内研修や市町村の教育研究会に招聘され、各校の調査結果について、指導・助言を依頼される機会がある。その際、各校では、課題について事前に分析を行い、今後の対策を立てているが、年度当初は、次のようなコメントが多数見られた。課題は、「語彙が少ない」「読解力が弱い」「書く力が弱い・苦手である」「条件に沿って書くことができない」等であり、それを受けての対策は「読書をさせる」「書く機会を増やす」「条件作文を書かせる」等である。そこで、該当する設問に正答するにはどのような力が必要であるか、児童・生徒の解答からどのような力がついてないと考えられるかを分析し、課題の要因を探ることが大切であることと、その要因を踏まえて課題解決に向けた授業改善を図ることを伝えている。ここでは、「平成26年度全国学力学習・状況調査 中学校国語」の【B3三】を例に挙げ、学力調査問題結果の分析会（5月）の指導実践の一例とする。

出題の趣旨： 落語に表れているものの見方や考え方について、根拠を明確にして自分の考えを書くことができるかどうかをみる。

設問内容： 殿様「これがさんまか？」の演じ方を選び、自分の考えを書く。

A：家来を責めるように演じる B：家来に問いかけるように演じる

条件1： 殿様の気持ちを想像し、想像した根拠を、落語のあらすじや最後の部分から引用したり要約したりする。

条件2： 50字以上80字以内で書く。

【B3三】は、現行学習指導要領の特色である「伝統的な言語文化」を題材とし、今求められる「思考力・判断力・表現力」のすべて（下線部）を必要とする、象徴的な設問であると言える。だからこそ、詳細な分析を行い、課題（付いていない力）と要因を明らかにして今後の指導につなげる必要がある。まずは、「解説資料」の「出題の趣旨」「学習指導要領における領域・内容」を読み、どのような力が問われているのかを確認するように伝えた。そして、「解答類型」を参考に、満たしていない条件について、その要因を具体的に考えるよう助言した。条件1だけを取り上げても、波線部のように、複数の力が複合している。「気持ちを想像するにあたって、何に着目すべきかを理解しているか」「学習用語（根拠・引用・要約）が理解できているか」「あらすじを捉える力や要約の技能が身に付いているか」といった課題の分節例も挙げながら、分析の仕方を示すとともに、そこで明確になった課題に対するこれまでの指導の振り返りをすることを求めた。今後の取組にあたっては「解説資料」の「学習指導にあたって」と『中学校学習指導要領解説国語編』を読み、改めて、求められている（指導すべき）力と指導のポイントや、指導法・活動例を踏まえて授業改善を図ることを促した。『中学校学習指導要領解説国語編』を読む際は、設問に該当する指導事項の内容だけでなく、そこに書かれている内容と関連した指導事項や、同系列の下学年の指導事項の内容にも目を向けるよう助言した。東部教育事務所では、上記の流れをより具体的かつ発展的に示した「学力状況調査の結果分析・考察シート（単問・一覧）」を作成し、シートを活用した研修会を積極的に働きかけることを通して、教員の意識や学力調査問題の分析・考察力の向上による授業改善の支援を行っている。

(2) 中学校国語科授業における支援

「書くこと」の力の育成を課題とし、指導の力点を置いている教員は多い。その際、易しいテーマ例の提示や「型（構成・接続詞）」指導を繰り返し、書くことの抵抗感をなくすことを重視する例を見かける。また、単元の終わりに、必ず書くことを位置付けているという声も聞く。意欲を喚起させ、書くことに慣れさせることは大切であるが、ややもすると、該当学年で付けるべき力に応じた指導に至らなかったり、第2次と第3次の学習活動がつながっていなかったりしがちである。授業研究会や教科会への支援にあたっては、「書くこと」に限らず、重点指導事項と単元を貫く言語活動を設定した授業づくり（単元構想）の考え方の周知に努めた。また、領域間の関連指導、指導事項の段階的・螺旋的な系統性を見通した指導についても助言した。例えば、「書くこと」の指導において、第1学年「根拠を明確にして書こう 意見文」と第2学年「反対意見を想定して書こう 意見文」の公開授業支援にあたっては、研究（上記1の③）で捉えた「批評」につながる段階としての視点や、学習目標（重点指導事項）と学習材の特性及び既習事項との関連（読むことの学習材とのつながり）を踏まえた上で、ゴールイメージをもって主体的に学ばせたり、モデル学習を通して思考法や表現力を身に付けたりする授業になるよう検討会を重ねた。また、学力調査問題における課題が大きい第2学年「C読むこと(1)エ」の指導については、文章の内容を理解するだけでなく、文章の内容を自分の問題として捉えながら読み、自分の考えを交流し合う授業プランを紹介した。

3 平成26年度の実践の成果と課題

「調査問題結果の分析」について支援を行った結果、学力向上推進校において、「標準学力調査」「高知県学力定着状況調査」の分析や「授業改善プラン」の検証の際に、課題の要因を記述することができるようになった。分析力の精度の向上を目指した支援が今後の課題である。「現行学習指導要領の趣旨や内容、系統性を踏まえた国語科の学習指導や授業づくり」については授業改善を図る指導の継続が必要である。自ら研鑽に努め、誠意と責任感をもって支援にあたりたい。